

地域情報（県別）

【岡山】 専門的医療を提供する6つのセンターを開設-高尾聡一郎・倉敷平成病院理事長に聞く

◆Vol.1

2020年10月30日(金)配信 m3.com地域版

倉敷平成病院（岡山県倉敷市）は、脳神経疾患専門病院として1988年に開院し、現在では23の診療科目を標榜する総合病院に成長した。今、国が提唱している地域包括ケアの仕組みづくりに30年前から取り組み、着実に成果を上げてきた。先代の医療にかけの思いを受け継いだ2代目理事長・高尾聡一郎氏に、地域住民と共に歩む病院運営について聞いた。（2020年9月18日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら

——開院当初の病院の様子について教えてください。

1988年に、父親で脳神経内科の医師だった高尾武男が脳神経疾患専門病院「高尾病院」を開院し、翌年、平成の時代に入ると同時に病院名を「倉敷平成病院」に変更しました。それ以前、父は倉敷中央病院に勤務し、脳卒中の治療にも携わっていました。脳卒中の治療におけるリハビリが、急性期はもちろん、在宅で暮らすなかで欠かせないものになると感じた父は、「もっと患者さんに寄り添った医療ができる病院をつくりたい。高齢になっても、障害を負うことになっても、安心して年齢を重ねることのできるまちづくりが大切だ」という思いを強くしていきました。



倉敷平成病院理事長 高尾聡一郎氏

高尾病院を開院したころはリハビリテーションという分野が確立していない時代だったので、急性期の治療を終えると、市街地から離れた温泉保養所が運営する病院などでリハビリをしなければなりません。今でこそ、急性期病院を退院したらリハビリ施設や療養施設などが連携して、地域で患者を診ていこうという地域包括ケアの構想がありますが、30年も前のそのような構想がない時代に、父は「救急から在宅までをトータルにサポートできる病院」を目指したことになりますね。そして、開院から5年後には、脳神経疾患だけでなく、患者さんの要望に応じて、より幅広く専門的な医療を提供するセンターの開設を始めました。

——段階的に整備していったセンター構想とは、どのようなものでしょうか。

根幹は、「すべての医療は思いやりの心である」という意味の中国の故事に由来する「全仁会」というグループ名にあります。病気だけを診るのではなく、患者さんのすべてを継続的に診て、生涯を通してできるだけ寂しさを感じることなく暮らせるよう、われわれがサポートしていくのだという思いです。

私も急性期病院に勤めたことがありますが、退院後はやはりサポートしづらいです。地域包括ケアシステムでは、地域の病院や医師が治療をバトンリレーしていくわけですが、われわれのやり方は、当グループ内で、一人の患者さんに関して生涯を通じて責任を持って診ていくという仕組みです。

高尾病院開院以来、脳神経疾患が専門とはいっても内科的な診療も継続していましたから、生活習慣病などの予防に関して、地域の方たちのニーズの高まりを感じるようになっていきました。救急から在宅まで患者さんに関わる中

で、地域の要望に合わせて各センターを順次立ち上げ、職員を専属にし、センターで完結する専門的な医療を提供することがふさわしいだろうと考えたわけです。

——現在、6つのセンターがありますが、運営で気を付けていることはありますか。

センターを運営するには中心になって進めていく医師が大事です。病院の方針も当然ありますが、各センターの中心になる医師が取り組みたい医療を叶えることが組織としての役割でもあり、最も組織の発展につながると思うのです。ですから、当院の医師たちがどんな医療を目指したいのか、年2回ヒアリングを行って、方向性を確認し合っています。

——それぞれのセンターの特徴を教えてください。

1988年に県西部で初のMR検査機器を導入し、MR2号機を導入した1993年にまず平成脳ドックセンターを開設し、人間ドックと脳ドックで予防医療に取り組んできました。現在は年間約6000人が受診しています。その後、2002年に倉敷生活習慣病センター、2004年に総合美容センター、2012年に認知症疾患医療センター、2017年に倉敷ニューロモデュレーションセンター、2018年に神経放射線センターを開設しています。センターの整備とともに、より公共性の高い医療活動に取り組むため、2010年には「社会医療法人」の認定も受けました。

高齢社会を見越して早い段階から「もの忘れ外来」を窓口とする認知症の早期診断治療システムを構築しました。高齢化が進み、認知症の患者数が増えていくと、専門ではない病院でケアするのは大変ですが、当院はもともと脳神経疾患が専門ですから認知症にしっかり対応できます。「もの忘れ外来」が評価されて、岡山県から「認知症疾患医療センター」として専門医療機関に指定されています。



認知症疾患医療センター長の涌谷陽介氏（病院提供）

総合美容センターについては、美容形成外科を標榜している総合病院は珍しく、美容形成の手術に必要な麻酔が常勤の麻酔科医に頼める環境は極めて珍しいと思います。総合病院の中にあるので更年期障害などの不調も婦人科で併せて診てもらえますし、いつまでも美しく健康でありたいと願う女性が安心して受診できます。

また、脳疾患は高血圧・糖尿病・動脈硬化が引き金になることが多いので、日頃から倉敷生活習慣病センターでトータルにケアします。脳神経疾患の治療には欠かせない画像診断は、神経放射線センターで、経験豊富な診断医が最新機器を駆使して行っています。

——倉敷ニューロモデュレーションセンターは大変特徴的ですね。

ニューロモデュレーション療法というのは、パーキンソン病や本態性振戦など、脳や脊髄、末梢神経が原因となる難治性神経疾患の震えや痛みを軽減する治療法です。まだ聞き慣れない治療法かと思います。岡山県内ではこれまで岡山大学のみで行われていました。当院には、リハビリテーションをはじめとした手術前後のサポート体制があり、また、当院が目指す医療の方向性にも合致したことから、岡山大学の協力を得て当センターを立ち上げました。また現在は、徳島大学からもサポートしていただいています。



ニューロモデュレーション療法の手術風景（病院提供）

具体的には外科手術で電極や刺激装置を体内に埋め込み、通院で症状を診ながら刺激調整を行い、最終的には患者自身がコントロールするという先進の医療で、脳神経外科の中でも専門的な技術と知識を必要とします。こうした神経疾患は、まずは薬物治療を行うのですが、薬物でのコントロールが難しい場合があります。全てのケースに効果があるわけではありませんが、ニューロモデュレーション療法を取り入れることで症状改善の可能性が高まるため、脳神経内科の先生方に向けて提案しています。

――力を入れているリハビリテーションについて教えてください。

リハビリは、明るく開放的な空間で行っています。リハビリセンターがあるフロアは33年前のプランですが、リハビリの邪魔になる柱を入れず、広い空間にしたいという父の思いがこもっています。



リハビリテーションセンター（病院提供）

院内では専門医が常勤2人体制で回復期リハビリテーション病棟91床を運営しています。患者さんによっては退院後も継続的なリハビリが必要になるので、通所リハビリ、訪問リハビリにも対応しています。スタッフ数は138人で、県内では最も多いと思います。スタッフは院内、訪問それぞれの部署に分かれますが、新人にはいろいろなリハビリのステージを経験してもらい、将来的により専門職として究めていってほしいですね。

◆高尾 聡一郎（たかお・そういちろう）氏

倉敷平成病院理事長。1998年岡山大学医学部卒業。岡山大学医学部、岡山赤十字病院の脳神経外科勤務を経て、2007年に倉敷平成病院脳神経外科に入職。同病院の前身・高尾病院を開設した父、高尾武男氏から2013年に社会医療法人全仁会の理事長職を引き継いだ。

【取材・文＝内田吉美（写真は全て病院提供）】

